




論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏名	馬淵 沙弥佳	
学位論文名	Osteoporosis management in a rural community hospital in Japan: a cross-sectional retrospective study		
学位論文審査委員	主査	矢野 貴久	
	副査	内尾 祐司	
	副査	山本 昌弘	

論文審査の結果の要旨

骨粗鬆症は骨強度の低下により脆弱性骨折のリスクが高まる骨格疾患であり、高齢化が進む先進国ではその有病率が増加している。本研究は、高齢化が進んだ中山間地域の病院での骨粗鬆症マネジメントの実態を明らかにすることを目的とし、女性患者における骨粗鬆症検査受検の有無などを、病院の電子カルテデータを用いて解析した。研究デザインは後ろ向き横断研究である。WHOにより閉経後の65歳以上の女性に骨粗鬆症検査が推奨されていることから、本研究では総合診療科定期外来に通院する65歳以上の女性を対象とした。主要評価項目である骨密度（BMD）検査の実施率は、対象者984名中137名の14%と低かった。ロジスティック回帰分析では、年齢が高齢になるほどBMD検査が実施されていない。また、要介護者では有意に検査実施率が低かった。一方、Bisphosphonate治療を受けている者、ならびに整形外科医による診療を受けている者は、BMD検査の実施率が有意に高いことが明らかとなった。加えて、骨粗鬆症の治療実施率は、検査実施率14%を上回った。これらの結果は、検査が必要な骨粗鬆症リスクを有する者や骨粗鬆症患者に対して十分に検査が実施されていない現状が示唆された。骨粗鬆症が引き起こす脆弱性骨折患者が増えることにより、個々のADL低下や健康寿命の短縮、ひいては医療費増大へと直結することから、医師などの医療従事者が骨粗鬆症マネジメントへの関心を高めることが重要と考えられた。同時に、骨粗鬆症検診普及など骨粗鬆症について一般市民への啓蒙の必要性が示唆された。本研究は、地域の実情にそくした骨粗鬆症の適切な診断と治療介入ならびに脆弱性骨折の予防活動を展開する上で、有用な知見と考えられた。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は、骨粗鬆症について超高齢社会の中山間地域にある病院における管理実態を調査し、骨折リスクが高い高齢者や要介護者ほど骨密度検査実施率が低いとの逆説的な臨床課題を明らかにした。本研究は、地域医療における骨折予防策や診療バイアスは正を講じる上で極めて有用な知見である。発表では研究の社会的意義と限界を適切に論じ、学位授与に値すると判断した。（主査 矢野 貴久）

申請者は、島根県の中山間地域で病院およびクリニックの診療録より骨密度測定検査の実施率を横断的に調査し、高齢者で介護度が高い患者では本検査実施率が低いことを多変量解析によって明らかにした。本知見は超高齢社会日本の中山間地域での骨粗鬆症の診断および治療の課題を浮き彫りにし、改善に向けた多方面への提言にもなるもので、学位授与に値すると判断した。（副査 内尾 祐司）

学位申請者は、島根県の中山間地域において骨粗鬆症の診療で重要な骨密度検査の実施状況について横断研究を実施した。その結果、加齢や要介護の状態と検査実施が有意に負に関係することを明らかにし、超高齢社会における医療提供の課題解決の糸口となる知見を提供した。発表・質疑応答に際し十分な学識を備えており、学位授与に資する者として推薦する。（副査 山本 昌弘）

（備考）要旨は、それぞれ400字程度とする。